

流 浪 の 賦 (1)—Byron

楠 本 哲 夫

‘この日僕は 36才の生涯を終る’

あまたの 瑕疵^{きず}のあるがまま、血の騒ぐままに 熱血を、激情を、吼え、笑い、啜^{すす}りなき、慟^{どうこく}哭し、幾可的直線をつつ走った Byron の 36才の 短かかった生命^{いのち}をいま燃えつきんとして、その臨終^{いまわ}のきわみに最後の蠟燭^{とも}の灯し火の明滅するを疑視しつつ Byron は ドラマティックな、みづからの 生涯に 訣別を告げた。

‘人間の生涯の美しくあるためには、その最後は悲劇でなくてはならない’
とオスカー・ワイルドの言ったことばは いつの世も、われわれの胸をうつ。
‘On this day I complete my thirty sixth year’ は
Byron の辞世の句として 千古不朽の名詩として讃えられている。

大旋風^{いのち}の生命は、その激しい動きの中にのみ存在する。 除々に しずまり、勢が衰えゆくとき それは崩壊してゆく。

Byron にとって—— 詩的激情をたえず活化するために その刺激が、その旋風が必要であつたのであり—— 古き経験^{うた}を詩ったワーズワスの詩情あるいは 純粹の抽象的歎びをうたうシエレー的詩情は、まったく 必要なかったのである。

偉大な詩歌は 万物の流れ、流転における一時的静止の瞬間をうたうのであ

る。

ゆえに詩歌にして 最高なるものは 必然的に ‘つかのま’ をうたった ‘瞬間のもの’ でなければならぬ。

かくの如き詩歌においては 旋回して澄める独楽^{こま}の如く ゆらぐことなく
その平衡^{つりあい}のポーズは完璧であり その旋律はたしかである。

秀れたる詩歌において 詩人は瞬間を生き その瞬間を生きつつ、その瞬間の中に みづから新しく生き変わる その胚芽が秘められている。

‘Oh! Snatch’d away...’

‘ああ、 花のさかりに 散ったひとよ’

と 瞬間的ゆきつまりから

‘Away! we know that tears are vain...’

‘去れよ、 涙は 空しいものでしかない’

と この叙情詩は 最後の節へと 入ってゆく。 爾余において その状況そのものの、比喩的描写、心象、はかなさのゆえに 我々は やがて 新鮮な緑の森へ そして 牧場へと迎はねばならぬと 警告されるのである。

しかし これらは 過渡期の詩であり バイロンの生涯の中心的時期の詩であり そのとき 多くの可能性が開かれていた。

イタリア逗留時代の きまりきった日課がだんだんと多くなってゆき 彼に迫りくるにつれ 情緒的、知的緊張がうすらいでくるのが感知できる。 Byron のテーマは ますます ‘行詰り’ ‘挫折’ の心境 を詩ったものに集中して

ゆく。即ち——監禁，追放，難破，追放，無人島に置き去りにされた水夫，漂流者——に集中してゆく。

その一連の作品は，——

The Prisoner of Chillon, に始まり，‘The Island’ と ‘On this day I complete my thirty-sixth year’ に終るものであった。その一連の作品の中には ‘The Lament of Tasso’ や ‘The Prophecy of Dante’ も 含まれている。

この一連の ‘流浪の唄’ の中で，多くの批評家たちの激賞した詩 ‘On this day...’ を取り上げてみよう。

これは Sir Herbert Reed のような敬虔な 自然派の 批評家によっても認められ また Arnold も 彼の名詩選の中に入れている。

しかし “There be none of Beauty’s daughters” は拒否されているにも不拘，この価値の方が ずっと秀れているように思へるが Arnold としては おそらく，

‘On this day...’ の詩の評価を，‘real’ という面でなくて ‘personal’ そして ‘historical’ の両面の評価において，名詩選の中に入れたものと思える。

というのは Arnold も また 俗物たちに最後の抵抗を試みる戦士としてみずからを考えることを望んだから。

Charge once more, then, and be dumb!

Let the victors, when they come,

When the forts of folly fall,

Find thy body by the wall!

もう一度 攻撃をしかけよ それから沈黙せよ！

勝利者どもよ 彼らが来りて

愚かなる要塞が 陥落するとき

その城壁のそばに 汝の死体を見出さん！

これが まさに Byron 詩特有の韻律なのである。 即ち——

Seek out—less often sought than found—
A soldier's grave, for thee the best;
Then look around, and choose thy ground,
And take thy rest.

願わぬに ^{なお} 斃るるもの多きに
求めよ、汝にはこよなきもの、^{つわもの} 兵士の墓。
^め 眼をやりて 未明かざるべき地をえらび
永遠の ^{いてい} 憩につけよ

いや、むしろ こういった方がいいかもしれぬ、これが Byron 詩の特有の韻律の中の一つだ と。 というのは ちょっと一読して ‘On this day...’ は、その構成において 混乱し 締まり具合が悪く 不適切であるとも いえるのだが、これが反面、Byron 詩の 特色でもあるのだろう。

おそらく この詩の緊迫した情況が この詩の評価に対し 多大の興味 関心をよせられるのであろう。

Gamba 伯爵は 次の如く 書きのこしている。

“今朝、Byron 卿が 寝室から Stanhope 大佐と友人たちが集っている部屋に入ってきて 微笑をたたえて 云った——

‘諸君は先日、僕がもう詩作しなくなったことを不満だと云っていたネ。

今日は実は僕の誕生日なのだ。それで僕はちょうど今ある詩をかきあげたところだ。そしてこれは僕がこれまで書いたどの詩よりもより秀れたものだと思う’

こう言って Byron 卿はあの高貴な、読む人の心をうつ詩 ‘On this day...’ を差し出したのである。

‘Still let me love’

新しい詩の創作に際し Byron がためらうときどことなく悲哀がただよいその動機に——たとえば何かを実証したいとか、特別の行事のための詩作をするとか——どことなく非 Byron 的なものが漂う。

誕生日はふつう Byron が気のむかないままだまりこんでやり過ぎた祝日であるが、今や Byron にとってこれは最後に迎える誕生日となった。

夜が彼の周囲に迫ってきた。今や Byron にとって変更できないものとして、難破者として死以外に逃れる道は用意されていなかった。旋風は抵抗できぬものでミソロンギの混乱の中で息詰まるものだった。

Byron は 戦いのすべての局面で 坐折し、一方において Byron の 内面的心の中心を支えた、実のり多かった孤独、静寂を奪われ、かつまた、他方、Byron の歴史的運命を充足してくれるであろう行動をも、意義深い交友的行動をも奪われてしまった。

‘Byron... Byron... Byron...’

若き日に、あの華やかな、ロンドンの社交界に若きプリンスとして Lord Byron の名声は チャイルド・ハロールド によって その一卷の詩集ゆえに時代の寵児として 英国のみならず、ヨーロッパの、いな、世界の津々浦々

に鳴り響いていった。

そのチャイルド・ハロールドには Byron 自身の抱^{かか}えた、いくつかの疑問をつぎつぎと、投げかけて、走り書きしてきたのである。

Fair Greece! sad relic of departed worth!

Immortal, though no more; though fallen, great!

Who now shall lead the scattered children forth,

And long accustomed bondage uncreate...

Oh! who that gallant spirit shall resume,

Leap from Eurotas' banks, and call thee from the tomb?

(II, lxxiii)

美しいギリシャよ！

失われた価値の 哀しき遺跡よ！

不滅なれ いまは なくとも

崩れしも その栄光は ！

誰が今 導きゆくか

汝の四散した児らを

そして 永きにわたって慣らされた

この屈従を 絶つべく

おー！ 誰が

あの勇しい魂を よび戻し

ユーロタスの岸から とびおり

汝を奥津城から 呼ぶのだろうか？

昔のギリシャの ^{うしなわ} 亡れた栄光を 誰が取り戻し 屈従のギリシャの児らを
誰が救うのか？ チャイルド・ハロウルド の中で、投げかけた Byron の

問いかけ、——その答えは —— Byron 自身だったのである。

ギリシャの児らを救った 救世主 Byron だったのである。

チャイルド・ハロールドの 詩った心は ギリシャの栄光をとり戻すべく
 ‘ギリシャの児らよ 起て^{しっだ}’ と叱咤、激励するものは その先頭に立ち、
 これを指揮する英雄出でよ^し という叫びだった。

そして今、 みずから、トルコの圧政のもとにしいたげられたギリシャ民族
 の独立を指揮する Byron 自身の強い意志の決行を示唆^{うた}した唄であった。

かくてギリシャ独立軍、最高指令官として深紅の軍服に身をまとい 英雄
 ホーマーの兜^{カブト}を冠り Byron は 今 馬上で 獅子吼する。

The Sword, the Banner, and the Field,
 Glory and Greece, around me see!
 The Spartan, borne bome upon his shield,
 Was not more free.

その叱咤激励の声を、馬上に獅子吼するみづからの声をききつつ 英雄詩人
 バイロンは 高らかに

‘On this day I complete
 my thirty-sixth year’ と

みづからの 燃えつきんとする生命^{いのち} を知りつつ唄う。

剣よ 旗よ 戦場よ
 栄光よ ギリシャよ わがめぐりに見るは。
 その楯にのりて帰りし スパルタ人も

かくも 自由には あらざりし

英雄詩人にふさわしい 清澄な心境をうたった 正に千古不滅の名詩である。

しかし——

この詩が 沈透^{しず}きゆく清澄な心境を勇ましく華麗に唄い得て その修辞法において 拔群であるとしても 一つの つまづき矛盾が発見される。 それは、

Spartan の語は 過ぎ去った少年の日に、ハロー校で学んだ哀しい名残り、面影をしのんだものだろうが ここで Byron は 何を 唄おうとしているのだろうか ？

Byron にとって 今はもう色あせた 幼き日の、 古典的誇り、所有物としての名残をとどむるものとしての追憶—— Dr. Drury 排折の先統に立ち厳罰をうけたこと——としてのみならば 何らかの意味において、とても貴重だった Byron 自身のポーズを支持するものであるのではと、敢えて問い質そうとするのではないが、——スパルタの兵士が、いかに高貴であろうともそれは、死せる勇者であり、いま、この危急存亡のときにあたって ギリシャの必要とするものは 生きている兵士であり、傷ついた兵士を 死者を運ぶ擔架ではないのである。 身を護^{まも}るための楯であり、担架としての楯ではない。 その転義、比喩は 整然としていない。

いかなる意味で スパルタ人は 自由なのか？ そして 誰よりも ‘より自由なのか？’ そして いかなる状況においてなのか ？ 意味の構成において この詩の、この点における挫折は、この詩全体の詩情をむしばんでいる。 この詩を細く眺めるときこの詩は 一つの詩ではなく 二つの詩が、不器用に くっつけられ 合体したもので、必らずしも 相互間の 関連は なくともよいのである。

この詩は 二つの詩が くっつけられたものだ と述べたが——
 その一つは、第1節から4節までと8節から
 もう一つは、第6節、7節、9節、10節からなっている。
 第5節が ぎこちなく 接点となっている。
 つまり——

Poem I —— ①, ②, ③, ④,⑧

(つなぎ) ⑤

Poem II ⑥, ⑦, ⑨, ⑩

という 構成である。

第一節は あきらかに 愛の唄である

'T is time this heart should be unmoved,
 Since others it has ceased to move:
 Yet, though I cannot be beloved,
 Still let me love!

いまは わが胸をさわがすときに あらず
 わが心すでに ひとの心さわがさずなりしゆえ。
 さはれ、ひとのわれを 愛することなくも
 ああ なお われをしてひとを愛せしめよ!

すすり泣くごとき この Byron の哀感はあまり いただけない。むしろ不快だ。

第二節がうたわれた詩想は 最初から この詩の分裂の胚種をうえつけてし

まっている。

My days are in the yellow leaf;
The flowers and fruit of Love are gone;
The worm, the canker, and the grief
Are mine alone!

わが過^とし方^{かた}は 黄ばめる葉にして
愛の花も実も いまはもうない
蝕^{むし}ばむ害虫が 癌腫病が
憂愁のみが われを 襲う

第二節は 分裂を悪化している。

このように短詩において うたい出しの最も早い部分から Byron が シェクスピアに頼らねばならないと考へたのはまずい不吉な出発だったとせねばならない。

かくて いま Byron は 植物の世界での leaf, flower, fruit, worm, canker と つぎつぎに 胸の激発を吐き出してゆく。——それは ‘Solitary Grief’ by ‘Twelfth Night’ out of ‘Macbeth!’ なのである。

The fire that on my bosom preys
Is lone as some Volcanic isle;
No torch is kindled at its blaze—
A funeral pile.

わが胸をむしばむ情火こそ
火を噴く島のごと 寂^{さび}し

その焰に ^{たいまつ} 炬火は ^{とも} 灯されず
 そは ^{とむら} 葬いの ^{ほむら} 炎 あるのみ

Fruit, worms, canker 果実, 害虫, 癌腫病 から転じて もう一連の ちんぶな表現文句へと こじつけられてゆく, 即ち,

fires, islands, torches, volcanoes, funeral pyres 火, 島, たいまつ, 火山, 葬式の薪, の一連の ありきたりの文句へと すすむ。

そして Byron は それを 彼自身の劇詩 Sardanápalus から 及び Giaour から ^{いようせつ} 剽窃 している。

‘The cold in clime are cold in blood

Their love can scarce deserve the name;

But mine was like the lava flood

That boils in Aetna’s breast of flame.’ (1099–1102)

その風土に ^ひ 冷ややかなるもの
 その血は ^い 凍てついて
 その愛は
 その名に値せず
 されど ^あ 吾が熱血は
 たとえば ^{たけ} 猛り狂う
 溶岩流に 似て
 エトナの山に ^ふ 噴きあぐる

この詩に たとえ, 粗野な 未熟な面があるとしても————— その弾力性を, この最後の詩の, 弱々しい敗北的調子と比べてみよう。

そして その敗北は 情緒的のみならず 決定的である。 ほんの一年前に

Byron はドン ジュアンの 機知にとんだ一節の中で ‘火山’ を嘲笑している。

I have to hunt down a tired metaphor,
So let the often-used Volcano go.
Poor thing! How frequently, by me and others,
It hath been stirred up till its smoke quite smothers!

(XIII, xxxvi)

くたばった比喩を追いつめるのは
わしは きらいぢや
だから しょっちゅう使った ‘火山’ は
もう 放免しよう。
かわいそうに ！ しょっちゅう、しょっちゅう、
わしに そして 余人にも
掻きたてられて
その煙も 燻^{くすば}りかけたからね

それは いまだに ユーモアと 自己批判をもつ Byron の一面でもある

次の第4節では 最後の挫折を支える Byron の一面に われわれは対決する。雄弁家として名声をはせた Byron にして、ろれつのまわらぬ、不分明な、はぎれの悪い Byron の一面に 対決せねばならぬ。

The hope, the fear, the jealous care,
The exalted portion of the pain
And power of love, I cannot share,
But wear the chain.

希望、恐怖 ねたましきおmoi
 高貴^{けだか}きころ ゆえの 痛み
 そして恋の力 すべてわがものでなくなり
 身につけしものは ただ 鎖^{くさり} のみ

おそらく これは Byron にとって ある重大事を意味したのであろう——
 ながながとした脚注が要求するものを知ることが必要なほどの。

だが Byron は それを我々に与えてはいない。

alliteration 頭韻も (そして the letter P—P の字の頭韻も喜劇的配置構成
 以外は ほとんど効果的ではないのだが) 効果的であるとは必ずしもいえない
 不安定なものである。

苦痛の高揚されない部分、恋の力 とは果して 何を意味するのだろうか
 と考えさせられる。 Byron は それを 'share' するのか。我々は (Lord
 Mayors は別として) そもそも 鎖を 'wear' するのか？

この節は 混乱状態 をうたっていて、この不首尾な節の正反対なるものと
 して、未解説の状況を説明すべく あの華やかな、ヴェニス^{ヴェニス}の叙情詩に戻って
 みたくなるのは、もっともだろう。

弱々しく、むしばまれた果実や 火山島をすてて、 この叙情詩は みづか
 らをあわれむ ばやきへと たわみゆく。

第5節は 上唇を 毅然としめた、つなぎの部分であり ひきしめの節とな
 っている。

But 't is not *thus*—and 't is not *here*—

Such thoughts should shake my soul, nor *now*

Where Glory decks the hero's bier,
Or binds his brow.

されど かくて この地において いま
かかる思いに 心乱すべきときにあらず
この地こそ 英雄の^{ひつき}柩に 栄光は輝き
その^{ぬか}額を かざるに ふさわしきところ

そして この詩の節も すべて、まちがっている。

thus, here, now の語は、これによって Byron は 内面的激情を強調しようと、その強烈さを補ほうと努めているのだけれども その逆の語群、の用語も また誤っている。即ち shaken souls, bound brows, hero's bier の使用である。

しからば—————このような誤句が どうして Arnold や Sir Herbert Read 如き 卓越した批評家によって 是認されることができたのであろうか？ この二人の秀れた批評家たちが 全く興味ある答を出している。

たとへ、Byron が なんらかの意味で大詩人である と認めることから出発するとしても Byron はロマン主義的詩人である。

だからロマン主義的詩人ではない Byron の一面は歓迎されない、即ち、ワーズワス やシェレー的な色調を帯びる詩句は 狩り出して それらは没として その欠陥を見逃してやる… そうするんだ！ そうしたら、立派な尊敬すべき、‘ロマン主義詩人’ Byron が 誕生するのだ。ありがたいことだ。名詩選編者たちは、その背景をかくの如く 支持しているのである。

かくして Poem 2 (第2詩) が 始まる。

The sword, the banner, and the field,
 Glory and Greece, around me see!
 The Spartan, borne upon his shield,
 Was not more free.

Awake! (not Greece—she *is* awake!)
 Awake, my spirit! Think through *whom*
 Thy life-blood tracks its parent lake,
 And then strike home!

わがめぐりに見る
 剣、旗、戦場、そして 栄光とギリシヤよ
 その楯にのって帰りしスパルタ人も
 かくも 自由ではなかったろうに

目覚めよ、 (いや、既に目覚めたギリシヤにではない)
 わが魂よ、目覚めよ、 考えてみよ、^{なんびと}何人を経て
 汝の生命の血は その源の泉から流れるのか
 さらば ますますに 進みゆけ

Awake, my sprit!

目覚めよ、 わが魂よ、

と Byron は 叫ぶ。 しかし——

目覚めるためには ふり返って 昔の王朝のあの尊大さ 即ち、母系 Gordon
 家、スコットランド王からの降下としての子孫、たる Byron の血に耳を傾け
 ねばならぬし、このことのゆえに その名声よりも むしろ 少年時代 Byron

は 母への敵意をはぐくまれてきた。

そして もう一度、外へむかった怒濤は、自由へと、行動へと 進みゆき
結局、古代の足枷によって 拘束されるのである。

第8節で Poem 1 に戻ってゆく

Tread those reviving passions down,
Unworthy manhood!—unto thee
Indifferent should the smile or frown
Of Beauty be.

甲斐なき わが壮年の日よ
また湧きかえる情熱の炎^ひをふみにじれ
美しき人の 微笑も 澁面も
いまは もう どちらでもよいこと

この蘇ってきた情熱は 同性愛的なもの。おそらく Loukas —— Byron が
美しい地中海の景色をエンジョイしながら流浪の旅を続けたときに そばに侍^{はべ}
らせた美しい小姓たちのうちの最後に愛された美貌の page (小姓) —— への、
青い情念の炎であったのだろう。

戦と愛、 Byron の なじんだ、得意の対照的対句がここでは 最終的激し
い格闘となっている。 即ち、一瞬 アキレスは パトロクトロスのテントの
中で すねて ハローの教室の色あせてゆくビネット——ぼかし絵——にじっ。
と思いをはせる。

このテーマは Poem 2 に 納得しえない、不分明な 転調を与えている。

しかしそれにしても、すべてが その詩作成果が 実感的でなく おそまつで りくつぽくうるさく せっかちである。

If thou regrett'st thy youth, *why live?*

The land of honourable death

Is here: —up to the Field, and give

Away thy breath!

Seek out—less Often sought than found—

A soldier's grave, for thee the best;

Then look around, and choose thy ground,

And take thy Rest.

青春を悔ゆるなら 何故に^{いのち}生命永らうるや

栄光の死を迎へる国 ここにあり

いざ 戦場におもむきて

汝の生命を 捧げよ

願はぬに ^{なお}斃るもの多きに

求めよ^{つわもの}兵士の墓を——汝にはこよなきもの

目をやりて 汝の最後の地をえらべ

そして ^{とわ}永久^{いとい}の憩につくのだ。

第 1 行は——

少年時代に帰りたい願がそれほど強いなら熟年を生きる価値はない。よし、
そうであれば何故、生をみづから絶たうとしないのか？
それなら 戦場におもむいて死ぬのがよい。

これはそんなに勇気のいる要請ではない。^{つもの}兵士の奥津城が Byron にとって最も良き憩いの場所というのなら、それは Byron 自身の個人的判断として、それをコメントするのは無益であろう。

戦場にいる兵士が 自分のあたりを見廻して 自分の眠るべき場所を見つけることができるのか？ 戦闘のさ中であれ、息絶えんとするそのときにおいてすら、おそらくそれは不可能なことであり、笑止千万といってよい。そして internal rhyme 中間韻の かきたてる音が 音楽堂の魅力の音調をそえている。

Byron の最後の叙情詩は Byron にとって旋風が ぐるぐると完全に渦巻いてのち、中絶したときに筆をとったものとして むしろ異例の、特別の場合として考えられる。

Byron の後年の詩の中から、他の、そのような例も提供できるが、一連の長詩——批評眼に値する——は Byron の生涯の最後の段階に続く以前の時期において、その、 回想的、哀歌調、予言的調子として 終結している。

これらにおいても 同じ、精力の宙ぶり、神経の衰弱のあとをたぐることができる。すべて、流浪者症候群の投影である。すべて、Bonniard, Mazzepa, Tasso, Dante と 同じ投影として同一視さるべき作品群である。

しかし、それらは、随意的、同一作品群である。ミソロンギでの叙情詩はおそるべき現実が Byron の身に迫り来たたのである。だが Byron 卿の‘運命のめぐり’において ミソロンギの、この^{かんせい}陥井は 最初から強いけん引力をもって、致命的にじわりじわり おしよせた大旋風の目、として、且つ又、流浪の詩人 Byron が、その幼き日よりの流転のころ、ニューステッド、ハロー校、ケムブリッジ大学、グランド・タワー時代から、その外縁において巻きこまれつつあった‘永遠の宇宙’の中の、不吉な‘black hole’として認識されてよいであろう。—— もっともそのころは、その幼き日より、ハロー、ケン

ブリッジ、巡礼流浪の旅において、Byron は、幼き日の生活、旧道徳から社会から、彼自身から すっかり解放された自由が大旋風の次の足枷で、平衡を保ち得ていたように思へたのだが。

Byron の最も幼きころの時期は 愛において名声において 着実なしっかりと固定した核心を探究してきた。

第二期においては、しかし、東洋を旅し国内を旅して得た自己意識の中に動いている核心を探究している。

第三期は 低開発国、ドイツ、スイスの、喧喧囂囂^{けんけんごうごう}たる変遷、推移の中で、半ば不決断の状態で 摂政時代の社会の鬱血と動乱の渦の衝突に遭遇する。

イタリーは 芸術、建築、セックス、Ferrara—Rome の展望を通して コロシム^{コロシム}の焦点へと新しい急転換を遂げている。

最後の段階では 反対勢力の衝突のゆえに不安定な平衡が くつがえされるのである。即ち、テレサへの愛情、イタリーの自由独立への闘い^{たたか}にまきこまれたこと、毎日の生活への退屈、ギリシャへの牽引力、等々。

かく分析してきた Byron の 叙情詩が、実に、Byron の少年時代より憧れの、理想の国ギリシャですら、この風土ですら Byron にとって、これら いくつかの胸につかえたジレンマを解決するに充分でなかったことを如実に実証している。

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford, Byron: Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge, The Poetical Works of Lord Byron: Lewis
Prints.
- 3) Leslie A. Marchand, Byron's Poetry: John Murray.
- 4) Bernard Blackstone, Byron: Longman.
- 5) John D. Jump, Byron: Routledge & Kegan Paul.
- 6) Lafcadio Hearn, The English Romantic Poets: 北星堂